

喜志遺跡Ⅲ

— 介護施設の建設に伴う発掘調査報告 (KS2011-1) —

2012.03.31 富田林市教育委員会

1.はじめに

喜志遺跡は、市域北端部の喜志町、木戸山町から羽曳野市東阪田にかけて広がる弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。サヌカイトを産出する二上山から東へ約5kmに位置しており、石器の製作状況を窺える資料が出土することで知られている。

この喜志遺跡内において、短期入所生活介護施設の建設設計画が持ち上がり、文化財保護法第93条に基づく発掘届出書が提出された。2011年3月22日、事前調査を行ったところ (A～Cトレンチ) 、Aトレンチで土坑、Bトレンチで溝を検出した。この結果を受け、遺跡保護に配慮した設計変更が行われたが、なお保護できない箇所があるため、協議を行った。事前調査時にはCトレンチで遺構を確認できず、計画地北半分での遺構の有無が不明であったが、時間的制約から調査を行うことができなかつた。そこで、同年5月25日に事前調査を再度行い(D、Eトレンチ)、3箇所(1～3トレンチ)の計約28m²を本調査の対象に決定した。

本調査は富田林市教育委員会文化財課 角南辰馬が担当し、豊島享志との場尚代の諸氏が参加した。

本調査期間は同年6月14日から6月21日で、実働日数は5日であった。遺物整理作業は同課非常勤職員 栗田 薫が担当し、上田伸子と前野美智子の諸氏が参加した。なお、本書の執筆は3を栗田が、それ以外の執筆と編集を角南が行った。

2. 調査成果

基本層は、地表面から順に盛土（1層）、旧耕作土（2層）、旧床土（3層）、地山である。遺構検出は地山面で行ったが、湧水が激しく、1トレンチは地山面上層が青灰色に変色して遺構の判別が難しい状況であったため、上層を削らざるを得なかった。

1トレンチ ピット3基 (SP1～3) を検出した。SP1は径約30cmで半分がトレンチ外で、地山面からの深さは約20cmである。SP2は径約30cmで深さ約5cm、SP3は約30cm×約45cmで深さ10cmである。両者とも検出面からの深さであり、削った地山の厚さを勘案すると、残存していた深さはそれに15cm程度を加えたものになる。これら以外にもピット1基 (土層番号⑫) とSX2 (同⑬) が存在したが、平面形状をおさえることができなかつた。

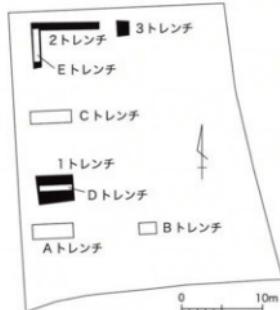


図1 調査位置（縮尺任意）とトレンチ配置 (S=1/600)

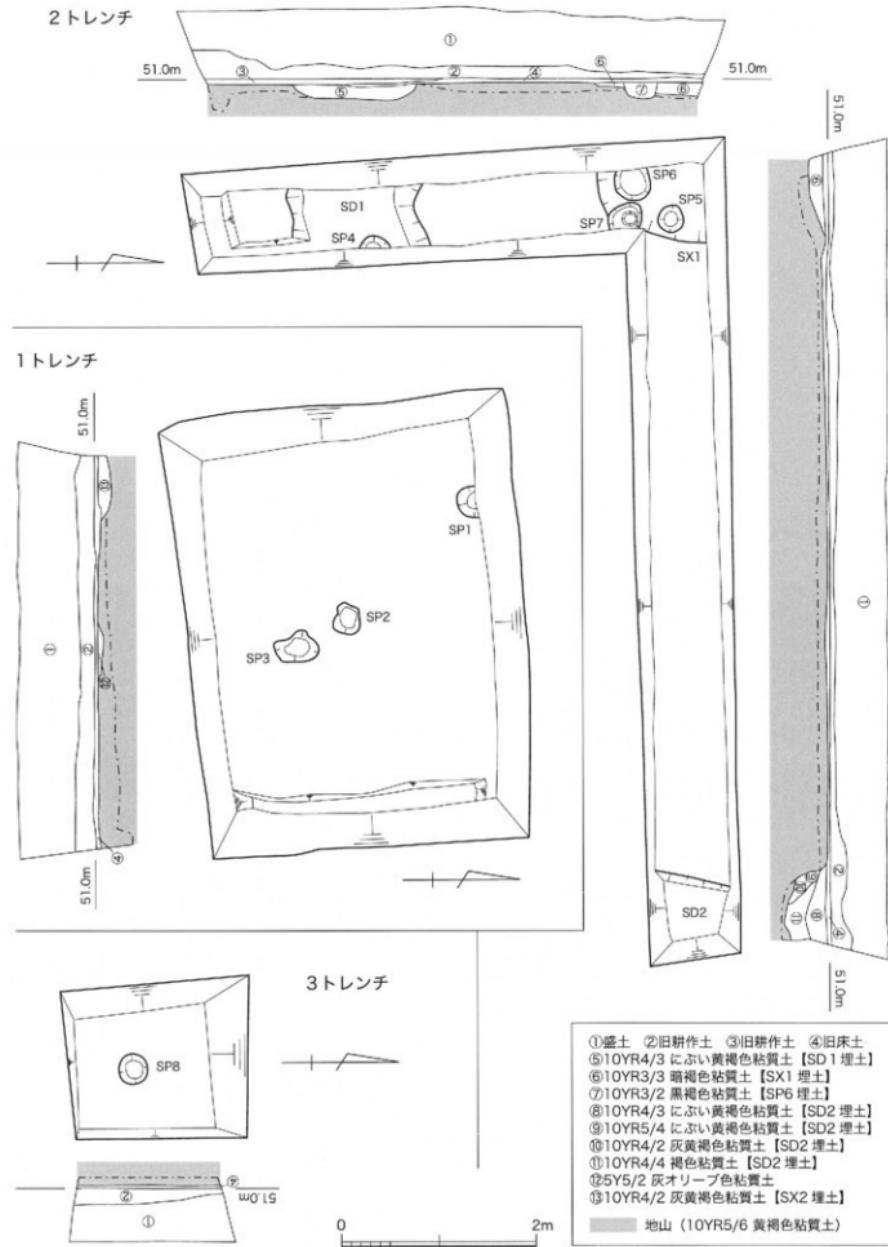


図2 レンチ平面および断面図 (S=1/50)



写真1 1トレンチ全景 (東から)



写真2 2トレンチ SD1とピット (南西から)

表1 出土遺物一覧表

地区	遺構名	土層	遺物	備考
1トレンチ	—	1~3層	弥生土器2点	1点は広口壺形土器 (機械掘削時に出土)
1トレンチ	—	地山直上	弥生土器片5点	1点は生駒西麓産 (遺構検出時に出土)
1トレンチ	SX2	埋土	弥生土器片1点	生駒西麓産
2トレンチ	—	1~3層	サヌカイト剥片2点	機械掘削時に出土
2トレンチ	—	地山直上	弥生土器片1点	生駒西麓産 (遺構検出時に出土)
2トレンチ	SX1	埋土	弥生土器片1点、サヌカイト剥片1点	サヌカイト剥片は調査工程中の微細剥片
2トレンチ	SD1	埋土	弥生土器片2点、サヌカイト剥片1点	

2トレンチ 溝2条 (SD1、2) とピット4基 (SP 4~7) を検出した。SD 1は東西方向に延び、幅約1.3mで深さ約15cmである。SD 2はほぼ南北方向に延びるようであり、東側の肩部が調査区外のため幅は不明だが80cm以上、深さはSD 1より深く約45cmである。

SD 1の底面で一部を検出したSP 4は、径約30cmで深さは約11cmである。トレンチ北西隅付近は地山面が崖んでおり、そこに暗褐色粘質土が堆積していた(SX1)。SP 5~7はその上面から掘り込まれていたが、SX1とピットの埋土が類似しており正確な平面形状を認識できなかつたため、SX1の底面で検出する形となつた。SP 5~7の径はそれぞれ約25cm、40cm、30cmである。SP 6は埋土に径約17cmの柱痕跡が残っていたほか、SP 7は底面に径約14cmの柱痕状の窪みが残っていた。各ピットの深さはほぼ同じで、トレンチ西壁の状況より残存していた深さを復元すれば、20cm程度となる。

3トレンチ ほぼ中央でピットを1基検出した(SP8)。径約30cm、深さ約16cmである。

3. 出土遺物

今回の調査では1トレンチと2トレンチから遺物が出土しているが、3トレンチからの出土はない。出土遺物には弥生土器とサヌカイト剥片がある。それらの出土状況は表1に示したとおりであるが、出土状況から特筆すべき意味の窺えるものはない。

弥生土器はすべて小破片で、出土点数も18点と少ない。また、器種の分かるものは、1トレンチで機械掘削時に取り上げられた広口壺形土器の口縁部片1点のみである。この広口壺から所属時期を判別するしかないが、この広口壺の口縁端部幅が0.8cmと、拡張しない特徴をもつことから、II様式期からIII様式期古段階に所属する可能性が高いことが窺える。なお、胎土の特徴から搬入品として識別できるものには、いわゆる生駒西麓産とされるものが2点ある。

サヌカイト剥片は4点あり、2トレンチから出土している。1点は原面を打面にした石ハンマーの直接打撃で生じた剥片、2点は剥離面打面にして直接打撃で剥離した剥片である。残りの1点は有機質の軟質ハンマーによる直接打撃で生じた剥片であるが、こ

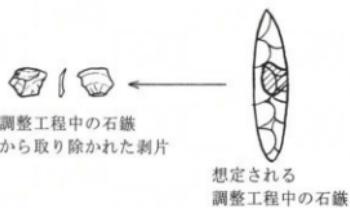


図3 微細剥片実測図（実大）と調整工程中の石鏃想定（斜線部分が取り除かれた剥片）

の剥片は剥離意図が明確に分かる資料でもある（図3）。最大長6.7mm、最大幅7.2mm、最大厚0.8mmを測る剥片で、主剥離面側に傾く内傾打面をもつ。先行剥離面の剥離面構成は4面で、そのうち3面が主剥離面とほぼ同方向から、あと1面は末端側にあって主剥離面に向対する方向から剥離されている。この先行剥離面の構成と主剥離面に残された内傾打面の状況を合わせ考えると、この微細剥片は石鏃などの小型の両面調整石器製作の調整工程中に、接線打撃で割り取られたものであることが窺える。

遺物の出土量は少ないものの、今回の調査でも過去の喜志遺跡の調査成果に整合する弥生時代の喜志遺跡の資料が追加された。具体的には、サヌカイト製の石器（トゥール）こそ出土しなかったものの、石器製作時の具体的な姿を彷彿とさせる資料が出土したことである。すなわち、石鏃などの小型の両面調整の石器の製作工程中に取り除かれた剥片、いわゆる「石屑」が確認できたのである。石鏃などの小

型の両面調整の石器は、成形工程・調整工程・仕上げ工程を経て作られる。そして図3で示した出土剥片は、これらの製作工程中でも調整工程段階に剥離された剥片なのである。このような資料は、「動作連鎖」の観点から観てはじめて抽出できるものであるが、遺跡内における石器製作の実態を具体的に示す資料として、大型打製石器のポイント・フレイクとともに、定性的な石器資料として注目すべき剥片であることは確実である（栗田2010・2011）。

4. おわりに

喜志遺跡における弥生時代の居住域については、現在把握されている遺跡範囲の北寄りに存在し、石器製作の作業空間を挟んだ西寄りに方形周溝墓の墓域が存在すると理解されている（小林ほか1983）。今回の調査では、不明な点が多い南部の様相が明らかになることも期待されたが、調査面積が狭いこともあり、検出した遺構の性格に言及することはできなかった。しかし、それは遺跡の保存が図られたということでもある。末筆ながら、遺跡保護および調査にご理解・ご協力いただいた医療法人 祐青会に感謝の意を表したい。

参考文献

- 栗田 薫 2010『弥生時代石器の技術的研究』
- 栗田 薫 2011「弥生時代石器研究の議論の確実な根拠を求めて—ペルグラン先生の世界への接近—」『平成23年度特別展 サヌカイト—元始の鉄—』香芝市二上山博物館
- 小林義孝ほか 1983『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要・VI』 大阪府教育委員会

報告書抄録

ふりがな	きしいせき							
書名	喜志遺跡III							
副書名	介護施設の建設に伴う発掘調査報告（KS2011-1）							
シリーズ名	富田林市文化財調査報告							
シリーズ番号	49							
編著者名	角南辰馬（編）栗田 薫							
編集機関	富田林市教育委員会							
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL 0721-25-1000(代)							
発行年月日	2012年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因	
きしいせき 喜志遺跡	富田林市喜志町三丁目	27214	1	34° 31' 31"	135° 36' 37"	2011.6.14 ~ 2011.6.21	28	介護施設 の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
喜志遺跡	集落	弥生時代	ピット、溝	弥生土器、サヌカイト剥片				